

## 全体討議

### ○司会（香月秀雄放送大学学長）

司会の香月でございます。

早速シンポジウムを始めさせていただきますが、最初にちょっとお話ししておきたいことは、昔は——昔昔、大昔じゃないですよ。比較的近くの昔では、組織あるいは国家管理をする人のために高等教育というものが大変必要でございました。ところが、今の時代というのは一人一人の人たちが大学に相当する高等教育というのを必要にしてきました。なぜかということは今さらお話しをする必要はないと思いますけれども、これが大変大事なことでございます。

そのために昔は、ある場所に人を集めまして教育をいたしました。そうすると、特定の人しかその条件に当てはまりません。しかし、一人一人の、国を形成している人たち、あるいは組織をつくっている人たち、その一人一人が高度の高等教育、大学教育というものを必要とするということになりますと、そう簡単に、昔のような形でもって人をある場所に集める、固定をするという教育は非常に難しくなってきました。

本日のシンポジウムの主題である「遠隔教育」という問題も、そこから出発しております。この、離れたところの人間に、しかも高いレベルの教育を受けさせるということは、言うべくして大変難しいことでございまして、メディアの問題も当然いろいろと出てまいります。それから、幸か不幸か、各国ともいろいろな伝統的な大学を持っています。古い歴史を持った大学というものは、すばらしい点もございすけれども、その反面、いろいろ新しい形の教育というものを始める場合に、ある場合には、障害になることがございます。きょうのパネリストの方々の中にも、そういうご発言が少しあったようでございます。そういったようなものを抱えて、きょうお集まりくださった先生方にいろいろな問題提起をしていただきまして、現状もお話ししていただきました。

きょうは幸いなことに、スピーカーのほかにコメンテーターとして、国連大

学の広報部長をしていただいておりますシンドラー博士と筑波大学の黒羽教授が来ていらっしゃいますから、先のパネリストのお話を聞かれて、コメンテーターの方からご発言を願いたいと思いますが、よろしゅうございましょうか。

シンドラー先生、どうぞ。

#### ○シンドラー（国際連合大学広報部長）

議長、そしてパネリストの皆様、ご参加の皆様、どうもありがとうございます。きょう参加でき、非常に光栄に思っております。私にとりまして、非常に意義のあるお話が多くありました。皆様にとってもそうであろうと思います。

さて、ここで発表に、オーディオ・ビジュアルを補助として使えるとわかりまして、私は、〈デュアリング・バンジョー〉という歌が手に入らないかと思いました。私が何年も働いていたボツワナの遠隔教育放送のテーマ音楽で、これがまた、まことに、テーマ音楽にふさわしい歌なのです。

この歌をご存じない方、また、映画をご覧になっていない方に対してお話ししたいと思いますけれども、この話はアメリカの、非常に人里離れたところにカヌー旅行をした4人の若い都会のプロフェッショナルのお話で、そこで彼らが会うのは自分たちとは全くちがう人々です。社会のもう一方の極にいるヒルビリーと呼ばれる人たちです。この映画の中にこんな場面があります。この4人の1人が谷にいてはるか上の方にある橋を見上げます。そこには1人の少年がいました。

さて、この専門家はギターを手にとって、遠慮がちにコードを1つひきます。上の方にいる少年はためらいながらバンジョーでそのコードを鳴らします。下の男はもう1つやってみる、上でその音をひろう、そんなふうにして、次から次へとやっていくうちに、いつしか2人は完全なハーモニーで、演奏しているのです。遠隔教育のテーマ音楽として、何てすてきなんでしょうと思います。私たちがやろうとしていることを実に明確に表現していませんか。中央から何かを送られてくるとするなら、それは受けとられる必要があります。それに対する応答がなければなりません。そして、一緒に学び育たなければならないわけです。

私ども思いますに、きょう発表されましたケース・スタディーの中でも、これを証明してきたのではないのでしょうか。

私はきょう、さまざまな制度について、いろいろと規模が違った話について聞いてきました。中国では、非常に数多い学生が放送教育を受けている。恐らくブリティッシュ・コロンビアの人口よりも多い学生が、中国ではこのような放送大学で勉強していることがわかりました。また、運営方法も様々に異なることがわかりました。OLIとNTUとを比べましても、いろいろと制度が異なっているということがわかりました。運営の仕方、方式におきましても、それぞれ異なっております。

しかし、いろいろとご紹介がありました制度に関して、二つの共通の点が考えられます。まず第1が新しいメディアの採用、開発、そして進歩ということであります。もう一つ強調したいのが、新しい技術によって可能となった協力の潜在性、可能性であります。

ニューメディアとは何であるか、考えてみようと思います。遠隔教育——私が1961年に初めて携わったときの話でございますけれども、当時はあくまでも印刷教材に縛られておりました。これがあくまでも、私どもが行っておりました教育の中心であったわけであります。カナダにおきましては、いまだに印刷物が基本であると考えてよろしいと思います。韓国でもそうだと思いますし、タイのSTOUにおきましても、中心になっているのはいまだに印刷教材であるわけであります。

ところが、1970年代の傾向でありますけれども、北米大陸の遠隔教育において、印刷物をやめにしてニューメディアを採用しようという傾向が出てまいります。しかし、今ではそれが変わりまして、遠隔教育の初期に使われました伝統的な方法が見直されるようになってきました。やはり印刷教材はいまだに最も経済性の高いやり方であると考えております。残念ながら、そのコストの問題についてはあまり触れられていなかったように思われますが。

それ以外にもメリットがあります。まず、学生は自分のペースで勉強ができます。エレクトロニック・メディアの場合にはできないやり方で、マイペース

で勉強することができます。そして、それにもまして重要なのは、それは双方向である、ということでございます。スピードは郵便のため遅い訳ですが、双方向でできます。通信教育を通じて、私は何人かの学生と長い手紙のやりとりをしたことがあります。50年代に遠隔教育がラジオに移行して、ラジオですとかオーディオ・テープの場合などになりますと、新しい局面が生まれてきましたけれども、あくまでも印刷教材の補完的なものでありました。教育上は、大きな制限がありますが、このラジオの使用における限界について、ここで触れる必要はないと思います。

さてまたテレビの出現によって、これはビデオ・テープであろうと放送されたものでであろうと、大きく飛躍したわけであります。テレビは、なまの講義方式に非常に近いわけであります。ヨーク大学におりました時にテレビを随分使いました。閉鎖サーキットのテレビ講義を行ったわけであります。実際、講師を目の前にしていようが、ないしは隣の部屋に先生がいようが、テレビで先生を見ていようが、同じような経験ができるというわけであります。

しかし、テレビの場合もう一つ言えるのは、さまざまなことを証明したり実演することができます。これは、印刷物ではできないようなことであります。そういったメディアがなくては、可能ではなかったことであります。

テレビは、これまで使われたものの中で、今でも非常に重要なものであると思います。中国の中央広播電視大学においては、中心的メディアであろうと思います。テレビがタイトルになっているぐらいですから、その施設にとりましてはテレビが非常に重要な役割を果たしているわけであります。

さて、日本の放送大学におきましても、非常にユニークなやり方でテレビを使っておりますけれども、テレビは重要な役割を果たしているわけであります。

ここで強調したいのは、テレビの大きなメリットを考えるといたしましても、これは一方通行であるということであります。双方向的な遠隔教育は、電話によってまたパーソナルコンピュータにより可能になりました。現在では電子郵便、CAI、コンピュータ会議といったこともあります。また、タイの方がおっしゃったように、これには私も合意したいと思っています。けれども、恐らく、

コンピュータ技術が多く、遠隔教育機関にとって最も中心的なものになるであろうと考えているわけであります。

また、衛星ネットワークのおかげで、遠隔教育はどんな人物、また、どこにしようと可能になったわけであります。それをするだけの技術が、現在存在しております。また、マルチ・メディア・モードの場合ですけれども、これは、きょう発表されたすべてのケースは何らかの形でマルチ・メディアのアプローチであると考えられるわけであります。NTUの場合は、もしかしたらそこまではマルチ・メディアではないかもしれませんが、その潜在性はあります。でも、恐らくこれはあすの話題であろうと思いますので、きょうこの場でお話しする必要はないと思います。

エレクトロニック・クラスルームであろうと、また、パソコンを持っている施設であろうと、ファクシミリですとか、ボイスを受け取る、また、発信する施設であろうと、いろいろとニューメディアがあるわけでありますけれども、それはすべて対話形式の遠隔教育を行うことができる。これはフェイス・ツー・フェイス・ラーニングに匹敵するだけの効力が得られると思われれます。新技術は存在します。それは採用されています。きょうの発表を通じて、そのことがわかりました。

さて今度は、協力の可能性について触れたいと思います。これらの新しいテクノロジーの利用法ですけれども、一つの問題は、非常に高価であるということとであります。日本の放送大学のお話に出ましたけれども、何カ月にもわたりまして、何名もの人が参加するチームがつくられるということとありました。これは非常にお金がかかるわけであります。そして、まさに、そのことによって、いくつかの機関の間で、また国の間で、協力し持っているものを分かち合うことで、一定の経済性を得たいという希望が生まれてくるのです。

それは各国によって状況は違います。日本の放送大学は、他の組織の資料を使っています。その著作権の処理は非常に難しいといった指摘がありましたけれども、他の機関の資料を使っている。私の故郷ですがブリティッシュ・コロンビアのO L I 場合には、アサバスカ大学の資料を使っている。アメリカのN

TUの場合には、22の大学の資料を使っている、共有しているということでもあります。

また、国同士の共有方式もあります。ブリティッシュ・コロンビアのOLIでは、カルフォルニア・コースト・カレッジ・コンソーシアムやイギリスのOUE等の材料を使っております。また、ウエガマ先生は、イギリスの公開大学やブリティッシュコロンビア大学との共同制作にふれられていたと思います。つまり、カナダ国外、アメリカ、イギリスについて知っている訳ですが、言語は同じですし、それにアメリカとは文化も同じだという人もいるかもしれません。思わない人もいるでしょうが。

さて、言語圏を飛び越えて、他の言語圏と協力を行おうという試みもあります。例えば日本は、タイや韓国と米に関する教材制作の協力の可能性が探られております。また、コンピュータを利用した学習用の教材が国際市場を目標において、開発が進められている例もあります。恐らく、この傾向はもっと拡大されるものと思われます。

その例を挙げてみましょう。例えば、基本的に非常に学術的なものであるもの、数値ですとか、そういったものは、国の間のギャップが非常に少ないわけがあります。一つの言葉で一つの国において開発されたプログラムは、他の国においても、翻訳さえすれば転用して使えるのです。テレビ方式であろうとCAIであろうと、そういったコースの例の場合には大きな協力の可能性が潜在しております。国境を越えて、同じものが使えるわけです。2～3カ国以上の国が参加して、こういったコースを開発するのが非常に望ましいわけがあります。

これによって、学習を強化することができます。例えば農学ですとか衛生学ですとかエネルギー学ですとか、そういった場合は、特に第三世界などにおきましても同じような経験を共有することができますし、非常に意義ある、価値あるものだと思います。

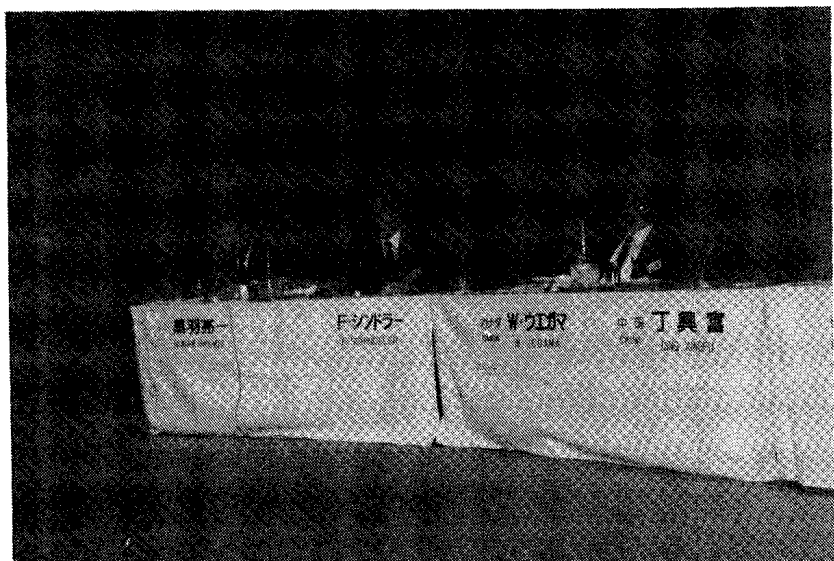
また、一つの文化に特有なものであると考えられている科目もあります。しかし、そのような分野におきましても、共同制作によってすぐれたプログラムが開発できると考えられます。比較政治学に関しましても、共同制作を国境を

越えて行くことができたなら、非常に役立つのではないのでしょうか。また、制作面における協力が困難である場合には、例えば技術的なノウハウや、資料を共有することもできます。例えば、コースのあるセグメントないしはあるビデオですとかテレビですとか実験方法ですとか、そういったものを共有するわけです。それを使うことによりまして、それぞれの国の特有のプログラムにつくり直すことができます。

さて、そのような協力が可能であるといった願いをもちまして、私どもの国連大学におきまして遠隔教育国際センターを設立いたしました。ペリー卿のもとにつくられたイギリスの公開大学の敷地内にあります。この国連大学にある国際遠隔教育センターは、80カ国をこえる500もの機関と関係を持ちまして、ネットワークをつくり上げたのであります。これはもちろん大きな資源を意味いたします。ノウハウですとか資料などを、これだけの施設のものを使えるわけでありますから、非常に大きなインパクトを持っております。

したがいまして、議長、そのような共同ネットワークの可能性についての議論がなされれば非常にうれしいと思います。また、放送大学、そして放送教育開発センターの人々が、このようなすぐれた第1回大学放送教育国際シンポジウムを主催してくださったことを賞讃したいと思います。これは私どもにとっても大きな意味を持ちますし、お互いに協力することで、学ぶことがもっとたくさんあると思います。これは第1回の国際シンポジウムであり、今後このような試みが続けられればと思います。

どうもありがとうございました。



## ○司会

シンドラー先生、ありがとうございました。さすが国際連合大学の方で、常にいろんな国が協調していろんなことを一緒にやっいてこうではないかというモチーフが、脈々と流れております。大変感動的でございます。

それでは、その次に黒羽先生、お願いいたします。

## ○黒羽（筑波大学）

私は放送教育は全く素人なのですが、その素人がここへ引っ張り出されたのは、恐らく、たまたま臨時教育審議会の専門委員をしておりまして、高等教育のことを今審議しているからだと思います。

臨時教育審議会では、皆様ご存じだと思いますが、現在、日本の放送大学は関東エリアだけしか利用できないわけですが、速やかにこれを全国的に利用する方法を考えてみたらどうか、関東エリアでやっているように、UHFのテレビとラジオのFMを使う形にするのか、ビデオ・カセットのようなものを使うのか、それから、お金の方も、主として国だけが負担するのか、自治体も負担するのか、あるいは民間も負担するのか、そういうところはあまり決めてないのですが、とにかくこういう教育機会を、関東エリアということじゃなくて、日本全体に広げるべきであるという提案を一つしております。

もう一つは比較的抽象的な提言ではありますが、インフォメーション・ソサエティーといえますか、情報化社会における学校教育の変貌、社会教育の変貌その他のことについて、一つの分科会をもって一つの抽象的な提言をしておることがあったから、私もここへ来て、何かそれとの関連で感想を言え、こういうご命令かと思います。

午前中から各国のお話を承っていたわけですが、実はこの日本の放送大学ができる前に——たしか学生受入れを始めたのは昭和60(1985)年の4月からと記憶しておりますが、その前、半年ぐらい予告番組をしておりまして、その予告番組の中に「世界の放送大学」というのが一つありまして、本日進行係をしている阿部美哉先生が司会をされまして、なかなかいい番組がありました。



実は私、各国の放送大学について少しわかったのは、その番組を見たからであります、そんなこともありまして、きょう5カ国のお話を聞きますと、あのときに紹介された状態よりははるかに放送教育が進んでいるということがわかりまして、大変感銘いたしました。どこの国がどう進んでいるかなどということは、申し上げませんけれども、全体としてどうも日本は、技術という点ではかなり先進国の方じゃないか。エレクトロニクスの発達とか、そういう技術の方では先進国なんだけれども、それを利用して高等教育をやっているという点では、きょう発表のあったどの国よりも遅れているんじゃないかということ、非常に強く感じました。

これはどういうことなのか、遅れててもよろしいのか、あるいは日本も進んだ方がいいのか、そこはよくわからないんですが、それが大きな印象でございます。

それを多少ブレイクダウンしてお話いたしますと、今もお話がありましたように、結局放送教育といっても、伝統的な教材として印刷教材というものはどこの国でもわりあい大切にしているようです。我が国でも放送大学ができてテキストなどが市販されているわけですが、外国の方はあまりご存じないかもしれないかもしれませんけれども、我が国では初等・中等教育では教科書問題というのが大変やかましいわけですが、大学の教科書問題ということはだれも言いません。これは簡単に言うと、初等・中等教育の教科書問題はもう少しやかましくなくて、大学の教科書問題、教育問題をもう少しやかましくした方がよろしいのではないか。そのためにいろいろと、大学教育というものをもう少し科学的にしていく。それはいろいろなメディアを使ってやるわけですが、基本的な、古典的なメディアである活字というものは、やはり相当大的なウェートを持っているんじゃないかというようなことを感じました。

それから、カナダのブリティッシュ・コロンビア州のように、日本と同じくらい面積のあるところに240万しかないようなところでは、スクーリングといっても無理だというのは当然であります、ほかの人口の多い、韓国の例が一番感銘が深かったんですが、学習センターが非常に発達している、30何カ所か

ある、しかもこれに各大学が協力しているというようなところを、日本も大いに見習うべきではないか。関東エリアだけですと受講者も多くて、どこかの大学に学習センターというわけにもいかなかったでしょうが、全国的に放送教育を展開するとなりますと、それぞれ、独立の学習センターなどをつくっては、お金の無駄使いにもなりますので、この辺は地方の大学というものがその場所を提供してくれる。そのぐらいの場所はあると思うのですが、やはり既設の大学とのコンソーシアムといいますか、連携というようなことを、日本は韓国を大いに見習わなくちゃいけないのかなというようなことを感じました。

それから、先ほど総論として、日本はエレクトロニクスは大変発達しているけれども、どうも教育には利用できない。そこで、NTUの場合などは、非常に少人数の人に、比較的金のかかる新しい教育の手段、まあ、通信衛星を使ったような、こういうものは、やろうと思えば我が国でもできるんじゃないか。現に、ニューヨーク工科大学のマイコンを使った学生というのは、どこの国でも学生になれるそうでありまして、放送教育開発センターも、学生として入学しているそうでありますから、こういう通信衛星なり国際電話回線を使って——これは、電話回線がどのくらい安くなるかとか、そういう問題とも関係があるわけですが、こういうような質の高いニューメディアを使った教育というようなものもある。

従来、放送教育というと、香月議長が最初に言いましたように、高等教育の大衆化というような視点からだけとらえられていたわけですが、逆に、エリート教育といいますか、スペシャリストの教育みたいな点でも、ニューメディアと教育というテーマがとらえられるというのが、私には、大変勉強になりました。

それで、タイ国では、学習センターでCAIを使うようになる。CAIも、こういうことは日本は技術の方は非常に進んでいるわけですが、いかんせんそれは実験学校と称されるごく一部の学校で使っているだけでありまして、なかなかこれがシステマチックな教育の中でCAIを使っていくというようなことは、我が国の場合はまだ行われていない。タイ国にも大いに学ばなければなら

ないのではないか。

総じて日本では、放送教育といいますか、新しい教育はなぜ後進国なのか。率直なところ、日本は教育先進国じゃないかと思っておったわけですが、そして、高等教育の普及という点においても、量的な普及という面では確かに私は先進国だと思うのです。逆に、伝統的な、しかもそれを相当手を抜いたような高等教育が普及し過ぎているから、こういう新しい高等教育が普及しないのかもしれない。その辺のことを、これは技術の問題としてではなく、教育論あるいは文化論として研究してみればなかなかおもしろいなと思って承っていました。

それからもう1点は、皆さんの方のご報告は非常に私にとって勉強になったのですが、ただ一つ物足りない——「隴を得て蜀を望む」という言葉がありますけれども、ぜいたくな希望を言いますと、それぞれの国においてやはり伝統的な教育があると思うのですが、伝統的な教育に、こういう新しい教育がどういうインパクトを与えているのか、その相関関係がどうなっているかというようなお話は、今回はどうもなかったような気がいたします。恐らくこのシンポジウムは来年も行うと思いますので、来年は何か、そういうような伝統的な教育と新しい教育との関係ということをテーマにしてやっていただくと、大変よろしいのじゃないかと、ちょっと余計なことかもしれませんが、一言申し上げます。

## ○司会

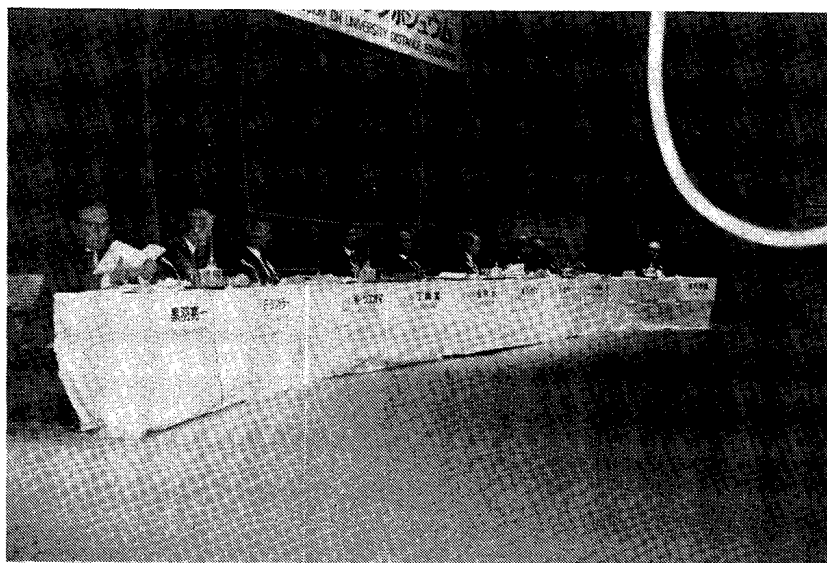
ありがとうございました。さすが臨教審の委員は立派なことをおっしゃいます。（笑声）

一番最後の、伝統的な教育と、新しいメディアを使った新しい教育の方法といったものは、どういうふうにかみ合っていくのかというお話が出なかったのは、まことに残念だったというお話でございますが、それぞれきょうのパネリストの方もお持ちだと思いますけれども、きょうは時間の都合でそれにお触れにならなかったのだと思います。

少し難くせをつけたいことがいっぱいありますが、例えば、技術の問題というのは日本は少しマシかと思ったけど、まことに後進国であると黒羽さんがひどいことを言いましたので、これだけは言うておかなければいけないと思うんですが、先進国でも後進国でもないんです。技術というのはでこぼこというのが特徴なんです。国によって、その時代によって、技術的に非常に伸びた分野と、比較的劣ってる分野というのが混在しているのが技術の進み方なんで、レベルが同じで上がると、きゅっととんがっていく発展というのは難しいというような気がします。これだけは最初に私——きょうは、この席に座っているのは放送大学の学長ではないんです。非常に中立的な立場に立っておりますので、（笑声）その点でひとつご了承願いたいと思います。

さて、コメンテーターのお二人の方のご発言がありまして、大変パネリストと違ったお話が出てまいりました。今度はフロアの方たちからひとつ、前のパネリストの方も含めていろいろお話がありましたが、こういう点ではどうだというようなことがありましたら、ご遠慮なくご発言を願いたいと思います。

では、コメンテーターがいろいろまた問題を提起してくれましたが、それについてご意見がございましたら、お一人ずつどうぞご発言になって結構でございます。



## ○スリサーン（タイ）

ご参加の皆さん、今お二方のコメンテーターのコメントに対してお答えしたいと思います。協力の可能性ということ、国連大学のシンドラー先生がおっしゃいました。コース・マテリアルや媒体を共有するという協力可能性に関してのコメントだったわけです。まずコース・マテリアルや教材を共有するという可能性なんですけれども実際は、在来 of 伝統的な大学の間では、もうすでに行われております。

例えば、教科書を考えていただきたい。私どもは、西欧諸国からの長年にわたっての輸入国だったわけです。テキスト・ブックを直接とり入れたり、翻訳を使ったりしていた訳です。ところで、新しい情報技術を使って協力を進めることになると、それは過去よりもさらに大きな広がりをもつようになります。特に、公開大学（名称はどうであれ）においてはそうなのです。現在では、それぞれの公開大学は教材・素材面での協力や技術的ノウハウでの協力など何らかの面で協力をなすものをもつようになっております。

実際私どもも、まず最初に放送文化財団との間の協力をやったわけです。これは、NHK制作のテレビ番組を選び少々手直しを行い、タイ語に吹きかえをいたしまして、放送いたしました。現在は、その有用性、また、効用ということに関しまして、タイの視聴者の側に立ちました評価をする段階に入っております。

まず番組は内容的に大変優れたものでありました。また、タイの視聴者にとりましても、大変プラスになるものでした。ということで、さらに多くの番組特に科学や技術関連の番組を選んで、このような試みを続けていけるのではないかと考えています。そしてもう少し広い範囲でこれを行えば双方当事者にとってコスト効果があると期待しております。

また、私どもはイギリスの公開大学とも二つの分野で協力しております。一つは生涯教育の部分でありまして、イギリスの公開大学の科学技術のコース・マテリアルをこちらが選びまして、それを当方の生涯教育のプログラムの一部として利用しております。これにより研究・開発にかかる経費を大幅に節減

することができます。

第2番目には、イギリス製造技術のコースでの修士号を授与することを計画しております。公開大学が開発いたしましたマテリアルと媒体を活用して、また一人のコメンテーターがおっしゃいましたように放送大学との協力も進めていこうとも思っております。ですから、国連大学の先生がコメントなさったように、媒体、マテリアル、ノウハウ、技術や、こういったものを複数の団体間で共有するという協力可能性の考え方は、私は全く賛成で、支持したいと思えます。

2つ目のコメントは、在来型の大学に対して公開大学が及ぼした影響についてであります。タイの経験では、私どもは在来型大学や地方大学と当初より大変緊密な協力をしておりまして、大変すばらしい協力関係がございます。そして、公開大学が一種の緩衝液といいますか、政治的な力を吸収するクッションの役割をしております。我々は資源も限られておりますし、また、政治的な圧力も、在来の大学に拡大したにもかかわらず、拡大を阻害するような政治圧力がかかっているものですから、私どもが存在することによりまして、こういった政治的な圧力を吸収するクッションの役割をする。その結果、在来大学からは支援が得られる、大いに歓迎されて、私どもも協力してもらえということとでございます。

また、伝統的な大学は、私どもが制作した教材やメディアを利用しています。すなわち本を販売することで、収入を上げております。なぜかといいますと、その大学の教授が私どもと協力してメディアを制作したり、コースの教材を書きます実際の著者であったりするからであります。

タイのほとんどの伝統的な在来大学は、近代的な技術を、その教育方法に生かそうかと真剣に考えています。そういう意味で、私どものような存在が非常に刺激になっています。それが、先ほど黒羽先生がおっしゃったような、伝統的なものに対してどのような変化が出たかということに対するコメントであります。

## ○司会

どうもありがとうございました、スリサーン先生。

今お話があった中に、お国では自分の国の中の大学の協力を求めるより、離れた国の協力の方がかえって得やすいというふうに私はとりましたけれども、どうですか。

## ○スリサーン（タイ）

いえ、そうではございません。まず第1に私どもは、既存の大学の協力をあおがざるをえませんでした。そうしなければ、公開大学の開学は不可能でした。つまり、資格のあるスタッフの人数が不足しておりまして、既存の大学の先生に来ていただかなくてはなりませんでした。私は今でも、大学省から出向いている形になっておりまして、給料は省の方から出ております。新しい大学の学長としてフルタイム勤務以上に働いておりますけれど、つまり、2つの役目に1人分の給料ということになりますか。（笑声）

## ○司会

いかがでございますか、ほかのパネリストの方たち、ご発言がありましたら、どうぞ。

## ○小林（日本）

先ほどの、特に黒羽先生のご忠告といいますか、日本の放送大学が、特にニューメディアだと思いますが、そういう技術的な新しいものを利用するのは他の国よりも非常に遅れているんじゃないかというお話で、確かに放送大学で現在メディアとして使っているのはテレビとラジオ、しかし、それをできるだけ十分に使うための努力も、まだまだ研究の余地があると思っています。

今各国でお話がありましたような、特にコンピュータを中心にした、これは主に学習指導の方に当たるだろうと思いますけれども、そういう面の利用というのは、実際に授業に使っている、学習に使っているという面では遅れている

ということはご指摘のとおりだと思うんです。私が最後にお話ししましたように、放送大学まだ昨年出発したわけでございまして、実際の教育に、あるいは学生の学習に、それぞれのニューメディアが一体どういう効果を発揮するだろうかということ、これは幸い放送教育開発センターが、国立大学共同利用機関であり、研究機関であるということで、そこでいろいろな角度から——もう大学が出発しましたので、実際の学生を一部利用しながら、というと語弊がありますけれども、実験的なものでもある効果があるかないかということを確認しながら、今広げている。

黒羽さんのお話だと、そんな速度じゃだめだとおっしゃるかもしれませんが、大学として教育に責任を持ち、生涯学習を進めていくという場合に、やはりあるテンポでやらざるを得ないという点があることをご承知いただければ、ありがたいと思います。

もう一つ、伝統的な大学の教育にどんな影響を放送大学が与えているだろうか。これも、まだ出発したばかりですから、そこまでなかなかいえないという点はありますけれども、今年度の事業として、放送大学と放送教育開発センターの共同で幾つかの科目を選びまして、オーディオ、ビデオのテープをつくりまして、それをかなり多くの数の大学、研究機関等に配りまして、それを検討してもらおうということで事業を進めておりますので、これらが、放送大学が直接行動を起こした一つのケースだと思います。

それ以外に、ご承知のように放送教育開発センターの大学公開講座として、国立11大学と共同してやっております、これは公開講座と銘打っておりますけれども、実際上は伝統的な大学の教育の中にいろんな影響を及ぼしておるということを、報告書でいろいろ見ておりますが、そういう経験等も踏まえて考えますと、やはり、徐々にではありますけれども、伝統的な大学の教育にいろんな影響を与えつつあるだろう。もっとこれを活発にやっていきたいという気持ちでございます。



## ○司会

ありがとうございました。

次に、セイヤー博士。

## ○セイヤー（アメリカ）

コロラド州立大学は名古屋大学と協力いたしまして、ビデオ・テープを提供するという試みをしております。これは例えば経済学のような学問におきまして、こちらで説明もごさいますけれども、典型的なビデオ・テープ、というのは、一つのビデオ・チャンネルと二つのオーディオ・チャンネルを持っているものです。そして典型的には、このオーディオ・チャンネルが二つあるうち、一つは声が入っていますけれども、一つはブランクになっているのが普通です。つまり、ビデオの画とオーディオ・チャンネルの方を英語で入れまして、そしてまた、完全なスクリプトの方も英語で提供する。そしてまた、マスター・クオリティーのオーディオ・テープ、日本語版と、両方のものを提供したわけであります。

すなわち、マスター・オーディオ・テープの方はまた、これはコロラド州立大学の方に戻されまして、そしてスピードをアジャストし、調整することによって、比較的容易に口の動きで日本語、そして英語が両方うまく、同じようなときに合っているような同期化させるという試みを行ったわけであります。

その内容に関しましては、今持っております、こちらに示してございますが、英語で聞きたいか日本語で聞きたいか、自分で選択して学ぶことができるというような協力プロジェクトを行いました。このような一つの協力も行っておりますし、また、例えばアラビア語、シンガポールの中国語などでも協力を行っております。

## ○司会

今、名古屋大学のお話があったので、名古屋地区だけでなく、京都の方にもそういうシステムを導入してもらおうという話を、京都大学の学長から伺い

ました。きょうテーマにしております問題と少し離れるんですが、少し高いレベルの技術的な、大学院レベルの授業を研究室から直接流していく。それには、多くの大学が協力をしてその教材を提供する、また、授業の内容をすぐ提供するというようなこともあって、大変理想的なことが行われているようでございます。

これはぜひ日本もほかの国も実行したいだろうというふうに想像をしますが、いかがでございますか。ほかの方たちは、そういう点について、大学院レベルの技術系統のテクノロジーの教育を、とにかく今やっというふうにして、それについて、いかがでございますか。

#### ○セイヤー（アメリカ）

NTUには随分お客様もいらっしゃいますし、実際どういうことをやっているかということをご覧になって、見学者が非常に多いわけでありまして。そしてまた、その参加費、加盟費などを払いまして——これは、参加するためには非常に参加費は少ないわけです。すなわち、受信局で1万ドルぐらいで受信できるわけで、それほど高いお金ではない。また、論文なども見ておりまして、見学をしている人が非常に多いわけでありまして。決して高いお金ではございません。このようなものを衛星を使って提供するの、ほかの国でも可能ではないかと思っております。

#### ○ウエガマ（カナダ）

協力の例ですが、私も幾つか例を持っております。そしてまた、先ほどコメントで出てまいりました点につきましてもお話ししたいと思いますが、一つ実験的なものとしたしまして、今年の初めか昨年のことですが、ブリティッシュ・コロンビア大学の医学部と、中国の北京の間で行われたものがございます。

これはブリティッシュ・コロンビアで開発された新しい方法を衛星通信による双方向型、中国の北京の医療関係者のグループにお見せしましてその後で双方の話し合いを行い、非常に大きな成功をおさめたということを聞いております。

また、より具体的な協力、つまり生中継の対話型ということですが、非常に大きな可能性があると思います。技術はもうそこにあります。そして、一端使い始めれば、使うことのできる技術はあるわけであります。

また、コメンテーターの方がおっしゃいましたような形の協力についてでございますけれども、私の心の中に今一つ興味のある点がございしますが、技術を導入する、採用するという場合には、どうも我々は、まず今までやってきたことのやり方を改善するような技術を導入するという方向にあるようであります。シンドラ先生が特におっしゃいましたけれども、テレビというのはフェイス・ツー・フェイス、面接授業に非常に類似したものを提供するという意見が出されました。

しかし、技術を導入して、それに習熟していくと、まったく新しい局面がひらけてくるように思います。

すなわち、技術というのは、ただ単に今までずっとやってきた従来の方法に似たような形のものにすればいいというものではないと思います。特に、コンピュータを使った教育技術におきましては、従来のものに近づけるなどというレベルを越えた、メディアの使用の可能性があるのでないかと考えております。

また、コース・マテリアル、印刷物などに関してですけれども、例えば今までは普通に使っていました、緑色のペンを使って編集者は校正を行う。しかし、ディスクに入った原稿を受け取りそういった作業を、ワードプロセッサによってかわらせ、電子機器による処理で印刷の段階まで行う、そういったソフィスティケートされたものにするということができると思います。

つまり、二つの線での技術進歩があった訳です。まずコース・マテリアルの編集のため、そしてもう一つは、教材制作のやり方をより高度化し新しい印刷の方法を開発するという、この二つの部分に特に考えられると思います。

そして、その中間あたりにデスク・トップ・パブリッシングがあって、まったく新しい統合された方法が、出現したといえると思います。メディアを使う、また、技術を進め教育を広めていくといった上で、こういった点も忘れてはな

らないと思います。

また、協力の可能性の一つおもしろい点としまして、遠隔教育の教材が、ウィット先生がお話しになりましたが、従来型の大学で使われている例があります。つまり遠隔教育の教材は商品になるのです。そして今日、それは国境を越えて取引されることが可能であります。

そして、資格自体がつまり、資格授与をすること自体が商品となるのです。新しいモデルが生れつつあるのは、技術の分野だけでなく、教育プログラムが提供されるそのやり方全体なのだと思うのです。

例えば香港公開カレッジは、OLIと提携いたしまして、OLIの教材を使い、外部試験機関として、サーティフィケート・レベルの資格授与をすることを考えています。マレーシアにおきましても、いろいろな国から教材や資格を導入して、それを国内でマレーシア人のために提供することができないだろうかと考えています。

また、イギリスにあります英連邦事務局は遠隔教育の国際的な総括的なデータベースをつくり上げるために出資しました。このデータベースにアクセスを図れば、膨大な量のデータを利用することができるようになり、何が利用できるのかといった情報を得ることができるようになると思います。

また、非常におもしろい可能性が日本にもあると思います。日本におきます教育システムの中で、カリキュラムを国際化させていこうというような方向があると聞いております。

また、OLIに関してでございますが、現在ビデオによる日本語のコースを開発中です。このビデオはジャパン・ファンデーションというところでつくられまして、テキストの開発もジャパン・ファンデーションの方から資金が出されましたが、実際の開発にたずさわったのはオーストラリアの人々なのです。このマテリアルに新しいコース教材をつけまして、ブリティッシュ・コロンビアで利用することになっております。

世界中からの協力によってつくられる教材をこのように使用することには、大きな可能性を感じています。また技術の進歩により、このようにして使られ

た教材を、自国なりの地方に合わせていくこともますます容易になってきていると考えております。

## ○司会

ウエガマ先生，どうもありがとうございました。

## ○木田（日本学術振興会）

学術振興会の木田といいます。

私，残念ながらパネラーの方のお話を伺わないで質問をするので，大変恐縮なんでしょうけれども，各国で既に日本よりも長いご経験をお持ちで放送教育をやっている。そこでちょっと一，二伺っておきたいことがあるんです。それは，テレビやラジオをお使いになる使い方によって，私のお尋ねすることの答えが違ってくると思うんですけども，今こういう質問をするのはなぜかということ，ちょっと申し上げます。

私は放送大学が出している番組を時間の許すときに興味を持って見ておるんですが，なかなか上手にお話をなさる先生もおられるけれども，なんて下手な講義なんだと思うような番組もあるんですね。テレビを使って，日本のようにフルタイムで全部講義に使っているかどうかということが，一つ基本的な問題なんですけれども，タイであるとか韓国であるとかってということで，かなりの時間，長い時間テレビなりラジオを使って講義をしていっていると，その講義の番組をおつくりになるときに，普通のこれまでの大学の講義と，どういうふうな提示の仕方に一番注意をもって番組を出しておられるのか。

同じように教室をそのままオン・エアで出せば十分わかるっていうふうにお考えなのか。やはりテレビやラジオでコミュニケーションするために，普通，教室でコミュニケーションするときと違った提示の仕方がどういうところにあるのか。あるいは，どういう番組が，テレビやラジオを通じて講義をする番組としてはより効果的であり，学生が喜ぶか。あるいは，皆さん方がおやりになったテレビやラジオを通じての遠隔教育の成果が，普通の大学の学生の講義

なり、それに対するリアクションと比べてどこが違うのか。こういう、既存の大学と、今おやりになっている遠隔教育の教授法との違いということを念頭に置いて、どういうご注意をしていらっしゃるかということをお伺ってみたいと思うのでございます。

## ○司会

ありがとうございました。

木田さんが大変いい質問をされました。大事な質問です。これのお答えをパネリストの方たちお一人お一人に、簡単にひとつ答えていただきましょう。よろしゅうございますか。

それでは、ウエガマ先生、どうぞ。

## ○ウエガマ（カナダ）

カナダは、たいていのリストで頭の方に来てしまいます。ということで、私から、お話することにいたします。

まず、ラジオ、そしてテレビの役割がどのようなものであるかについてお答えいたしましょう。また、ラジオに限らずより広くオーディオについてお答えいたしましょう。

まず我々の主な方針でございますけれども、メディアは、学習のプロセスを援助するものであって、どれが特定の1つのもので充分だというものはないということです。これはタイの方の発表で一番明らかなメッセージであると思います。我々の採用しております方針、特にテレビにおいての方針ですけれども、テレビはあくまでも補完的な役割を果たすものである。印刷物の補完的なものであり、印刷物があくまでも我々の教材の核心をなしているということであり、オーディオ・テープなども使います。かなり幅広く使っております。同じモードでも使っているわけではありますが、しかし、やはりそれは印刷物の補完的な役割でありますし、印刷物に加えまして、電話を通じたチューター・セッションも行っております。

〇 L I の二つの重要な要素は、印刷物と電話であります。

非常に興味深い特徴の一つといたしまして、視聴覚教材を放送のモードから離れて使用する場合、これは全く別な局面を持つことになります。教育学的な新しい局面をもたらすことになります。これはどういうことかといいますと、例えばオーディオ・テープを使う場合には、使ってはやめて別のことをする、そしてまた使ってはやめる、そういったことができます。

しかし、放送モードの場合には、リアルタイム・スケジュールに拘束されますので、そのような可能性はありません。30分なら30分、そのスケジュールに縛られるわけであります。

以上が我々が採用してきた方針であります。

このことにつきましては、テレビをもっと効果的に利用なさっている方々の方が、より適確なお答えができるのではないかと思います。

## 〇司会

はい、ありがとうございました。

それでは、丁先生、お願いいたします。

## 〇丁（中国）

私の意見を申し上げますが、私見でございますけれども、教授方式はやはりその国の文化的な背景に依存いたします。また、その教授の伝統といいますか、指導の伝統にも左右されると思います。中国の場合でございますが、イギリスの公開大学の専門家を招聘いたしました。ときにはアメリカのスタンフォード大学のテレビの専門家の方をお呼びいたしまして、指導をお願いしたこともあります。

まずテレビの講義といいますのは、非常にすぐれた質のものでなければならぬということでもあります。スタンフォードにおきますテレビの指導の専門家の方がおっしゃったことなんですけれども、フェイス・ツー・フェイスの授業方式はより効果的であるということでありました。したがって、矛盾とい

いますか、いろいろと対立といったことがありましたが、中国の場合に主な意見は二つのグループに分けられます。

そのうち一つのグループは、イギリスの公開大学の方針に賛成のグループです。つまり、テレビ番組の時間をさらに軽減するべきだと考える人々です。特に地方などにおきましては、少ない方がいいと唱えているわけがあります。地方におきましてはパートタイム、非常勤のチューターといったことがありましてテレビ講義の時間を軽減しても、それを補完するような人材がないということも考えられます。したがって、私の意見では、印刷物がやはりそのコースの核心としては最もすぐれた方法だと思います。印刷物を通してすべてを教えることができたならば、テレビですとかラジオ講義の必要がないわけです。私たちは、テレビの独特の特徴を生かそうとしているだけです。

## ○司会

金先生、どうぞ。

## ○金（韓国）

中国のことわざがありまして、日本に来たからには日本が少々わかったということだと思えます。ということで、日本語でしゃべらせていただきます。つたない日本語ですけれども。

私たちの学校でいつも研究の対象であり、大きな問題だと思っていたことをご質問なさってくださいました。教材の内容をどうするか、どういうふうにして提示するか、いつ提示したら最も効果的なのか、それから、いかに提示するか、まずこの三つの問題について、私の学校でやっていることをお話したいと思えます。

私は遠隔教育の専攻者ではありません。昨年4月研究教授としてこの学校に移ってきて、一番初めに始めたのが、この学校の1年生の入学生が、1学期が過ぎたら約40%あたりがドロップアウトするという大きな問題、その原因は



何か……。それを私たちは、恐らく、興味、それから、提示する教材に対する学生たちの必要性の認識度というようなものが作用しているんじゃないか……。もちろん個人的な理由もあるだろうと思いはしますが、それが確かであるかないかということを確認するために、5～6カ月汗を流したことがあります。いろんなことを発見しましたがけれども、やはり教材の内容と教材の提示の仕方、そういうものが根本的に間違っていたということを発見いたしました。

それで考えてみた場合、機会（オポチュニティー）は与えているんですね。それはだれでも聞けますから。教材も自由自在に買うことができるし、コストも非常に安いんです。一般の書籍の価格の半分くらいですね。

次は、機会が与えられていたら、学生の立場ではモチベーションが強くなければ、勉強しようとする意欲が強くなければだめですね。それは心理学の問題であって、やっぱり興味とか必要とかいうようなものをいつも学生たちが感ずるように、継続的に教材の内容を十分配慮して制作しなくちゃならないという、簡単に言えばそういう話になります。

それから、うちの大学の入学資格のまず第1は、高等学校の卒業生です。それから、年の若い人は、国家が施行する大学入学学力試験にどれくらいの成績をとったかというのが基準になっています。年の多い人には高等学校の成績を提出させて、それを反映していますけれども、若い人には、現在国家が施行しているそういう学力試験を参考にして入学を許可しています。

それで一旦入った後の学生たちに対する——年齢が非常に広く広がっていますから——学生一人一人の興味とか必要とかいうようなものを考えるということは非常に難しいので、いつもそのために、教材の制作、それから、その教材を中心として講義をする先生たちの苦勞が非常に多いです。

それから、学校の方針として、長らく大学の教壇で経験を持っていた年を取った教授、研究教授が多いんですが、こういう教授で構成された媒体審議委員会というのがありまして、国民学校みたいな話ですけども、教育の方法においては、特に遠隔教育においては必要だと思います。初めに導入部、それから中心部があって、その次は、この次の時間のために教材の何何を準備して読ん

でくださいとか、補助教材のどの部分を読んでくださいとか、皆さんこういうのをもう一度考えてみてくださいとかいうような言葉を必ず入れて、断絶がないように——1時間済んだらそれはそれっきり、その次はそれはそれっきり……。うちは20時間ですが、20時間終わったら、それはおのずと連続ができるだろうと考えることは間違っているというようにして、それをその審議委員会で事前に、一人一人の吹き込んだオーディオ・テープ、ビデオ・テープを審議をします。そして、失礼にならないようにその先生に、こういうのはこういうふうに直したらどうですか、といいます。

ところが、それは非常に難しいですね。何ですか、教授というのは唯我独尊といいますか、（笑声）非常に難しいけれども、あれをこれからしなくちゃならない。過ぎ去った夏休みの教授研修会において、根本的な態度を表明したことがあります。

そういうのが今私たちの一つの、解決じゃないけれども、やっている仕事のひとつで、いつ出すかという問題は、これは日本と非常に事情が違います。うちはKBSのネットワークにこれに乗せるんですが、早朝、それから、晩遅く、ときどき昼、あるいはゴールデンアワーはどうしてもだめですね。夜の7時、8時が一番いいんですけれども、これはみんな商売しているから、放送局も一種の商売で、絶対にその時間は譲歩してくれません。それで夜遅く11時から午前1時までですから、本当に学生はかわいそうですよ。それから、早朝は朝の5時から7時までです。そうしないというと、職場を持っていますから。こういうふうにして、いかに動機を強化するか、興味、必要を感じずるような教材をつくるかというものを中心にして、私たちのできることはしようと思って、今、審議委員会で努力をしています。

これくらいでいいですか。（拍手）

## ○司会

ありがとうございました。

私も大学におりましたが、今のお話は大変こたえました。唯我独尊だって。

(笑声) そうじゃない人もいますよ。(笑声)

それでは、スリサーン先生。

## ○スリサーン (タイ)

議長、ありがとうございます。

私も同じように日本語でお話しできればいいと思いますが、残念なことながら私のボキャブラリーは、食べものと果物に限られております。私は日本の食べものと果物がたいへん好きだということですが。

けさお話いたしましたように、タイにおきましては印刷教材を中心的なメディアとしております。そして、テレビ、ラジオは印刷教材に対する補助として使っています。また、テレビ、ラジオのプログラムはほかの目的にも使われます。この両者ともだれでもそれを見たいと思えば見ることもできる、公開性の媒体でありますので、一般大衆すべての人に対して知識を広めるということが2番目の目的です。

また、放送メディアはコース・チームによって制作されます。そして、一体だれを招待して教授にするか、また、テレビのプログラムでどういう先生方をお招きして出ていただくか、講師はどなたにするかというのを決定するのはコース・チームの裁量に任されます。コースの教材を書く人が番組の制作にまでかかわるという決まりはございません。教育工学の方に頼みまして、協力をお願いして、原稿作成を助けていただくこともあります。

番組に出ていただく方には必ずリハーサルに来ていただきます。そしてプロデューサーと小委員会が放送前に、見直しをいたします。ほとんどの場合にはこのようなスクリーニングと申しますか、準備をすることによりまして、木田先生がおっしゃいましたような問題を排除していくことができると思います。

三つ目としまして、テレビ、ラジオの番組のフォーマットについてお話しします。我々は、一方的に話すだけというようなプログラムはできるだけ避けたいと思っております。そのかわりにドキュメンタリー・タイプにしたり、また、より対話的な内容にしたり、特にテレビの場合には、実例を見せるような番組

を制作していきたいと思っております。

お話にありましたような単調な番組をつくらないようにするために、パーソナリティーをあまり打ち出さないような番組を作ることができます。学者の方に出演していただく時にも、テレビ写りがいいか、はっきり明瞭に話せるかということを考慮いたします。こういった配慮をスコタイ・タマチラート公開大学ではっております。

しかし、私たちも常にいいプログラムをつくっている訳ではございません。時々、知ってか知らずか、良くない番組を放映して、皆さんにもっと注目してもらうようにしております。（笑い）

ありがとうございました。

## ○司会

セイヤー先生。

## ○セイヤー（アメリカ）

ありがとうございます。

NTUですが、思い出していただきますと、22の大学からの協力を得ております。これらの大学の方からビデオ・テープによりましてコースが提供されるわけであります。ですから、例えば品質とか構成そのものといったものは、この22の大学の方でもう既に検討されているわけでございます。それぞれの大学の方で委員会などございまして、NTU用に提供するものを検討する組織がございます。

そして、私はコロラド州立大学で教えておりますけれども、また、NTUの方でも同じコースを教えております。コロラド州立大学の方ではコースはビデオを使って、コロラド以外のところにも参ります。そして産業界の企業の方は、大学で払われる授業料の2.5倍を支払っていきまして、教員にとってこれは1つのインセンティブになっています。

多くの教授の人々は余りカメラ写りがよくない、またはカメラの前ではもじも

じしてしまう人が多いわけであります。また、そうではなくたいへんやる気のある人たちもいます。私たちは、学生からレポートをうけ企業からもレポートしてもらったりしていますので、あまり、向かない方々には、その後また出ていただくということはいたしません。

また、もう一つこの大学の教授の利点といたしましては、産業界の学生はソフィスティケートされた人が多いので、教授側といたしましても非常に学ぶことが多いということがございます。

ある程度経験をつみますと、スタジオで単位授与のためではない短期コースのビデオの制作を行うようになります。発表でも触れましたように、1時間半のものをつくるのに1週間ぐらいかかります。これらのテープは、売りものになる訳です。

このような仕事を一生懸命やろうという動機づけになるのは、私の収入の大半が、このような、短期コースビデオから入り、大学の教室からのものではないということです。産業との関係ができてくるのもこのようなビデオに出て、人々に知られるからであります。

### ○小林（放送大学）

放送大学は本年は170科目ありまして、それぞれのテレビ、ラジオを担当された先生がどのような気持ちでやられたか。千差万別と言わざるを得ないと思うんですが、たまたま私が授業を二つ持って、一つがテレビの授業科目、一つがラジオの授業科目でしたので、両方について私のやったことを少し振り返ってお話しをしたらと思います。

テレビは実は実験番組で1回やったものでありまして、2回目になりましたので同じ科目でございましたが、「ビジネス・マネジメント」という大変実務的な、しかし、エレメンタリーなものであるということで、テレビの場合には実験番組のときにもそういうことを教えられて、なるほどと思いましたけれども、できる限り実際の企業あるいは工場の中身のわかるような写真、あるいは場合によってはロケも一部使っておりますが、そういうものを豊富に入れ

て、要するに多くの実際の画像をできるだけ入れたということ。

と同時に、前の実験番組では15回全部に、それぞれのテーマについての実務の人と終わりの10分ぐらいを対話をした、いろんな経験をしゃべってもらったということをやったんですが、余りにも多いので、この放送大学の本番組では15回のうち5回に絞りました。例えば実際の話をするというのは非常にテレビでも難しいテーマ、新製品の開発をどんな苦労をしてやっているかというようなことを食品会社にやらせようとか、私が一緒に出て話をする。あるいは家庭用雑貨の商品のマーケティングについて、非常に流通のうるさい問題ですけども、実際にそれを担当してやっている経営の首脳部の人に、その会社の宣伝にならないように、だから難しいんでして、やや抽象的ながら具体的にというんで、その会社の品物なんか出すときはマークをみんな外しちゃうとか、苦労しながらやりました。それが面接授業のときにその中身について私に質問をしてくれる学生もおるということで、やはりそういうところに関心を持ちながら学生が聞いてくれているということを感じました。

ただ、ラジオの場合はやはりそういうことが非常にやりにくいんですが、これはたまたま「財務管理」という金の管理の方の問題ですから、あんまり实际的にという例示を画像なんかで出す必要もないかもしれませんが。要するにその場合は、普通の大学の講義でもやれるかもしれませんが、印刷教材が既にありますので、重点を45分の中で三つぐらいに絞っちゃって、そのわかりにくそうなところを少し細かく説明してやる。そのときに実際の例なども出して説明してやる。そういうことでラジオの方の講義はやりました。テレビの方は、私が専門にしておりますマネジメントの問題については、今考えますと、まだいろいろ工夫ができるのではないかと考えております。

ご参考になりましたかどうか……………。

## ○司会

ありがとうございました。

シンドラーさん。

## ○シンドラ（国際連合大学）

大変おもしろいご質問が出されたと思います。在来型の大学はいつでも、余りコミュニケーション・スキルにすぐれていない教授に対しても非常に寛容であったと思います。私たちはだれでも教授のこっけいな話をいくつか知っているとしますし、学生の方は私たちに関していろいろ知っていることでしょう。しかし、遠隔教育におきましては、そのようなぜいたくは言っていられないと思われます。遠隔教育機関は特別です。コミュニケーションの技術がその活動の成功の成否のかぎを握っています。

幸いなことに、特にテレビの放送の場合には教授がたとえ外観がだめであったりコミュニケーションの技術がだめであったりする場合にも、さまざまな方法をもって補うことができます。今では「トーキングヘッド」を使おうという方は減っています。意味があっておもしろい教授法にするための方法は数多くあるのです。

先ほどのタイと日本のチーム・アプローチの試みは非常におもしろいと思いました。制作ディレクターも入れて、このチーム・アプローチを行うことで、それまで主人公であった教授は、メンバーの一人ということになります。それによって、教授の影響力がある程度減るわけであります。しかし、妥協もあるようで最終的な作品の少くとも内容的な面に関しては、教授がコントロールするようですが。もちろん、何らかの形でのバランスがとられているとは思いますが。ともかく、チーム・アプローチをとることで、教材制作において教授ばかりが中心になる弊害を緩和することができる訳であります。しかしこの問題は、必ずしも全面的に解決することはできません。なぜなら、プログラムの質は、最終的にはそれにかかわった人間の質に依存しているからであります。

## ○司会

はい、わかりました。ありがとうございます。

### ○黒羽（臨時教育審議会専門委員）

そのことについてはもう先生方の発言に特につけ加えることはございませんけれども、先ほどの私の発言に対する小林先生のお答えは、恐らく小林先生はわかっていてああ答えられたんだと思うんですが、べつに放送大学とか放送教育開発センターへの希望を申し上げたのではなくて、放送教育に対する日本の社会全体の受けとめ方についての感想を申し上げたわけであります。

それから、もう少し言えば、放送教育開発センターのようなところでいろいろとテレビ、ラジオを通じての教育の研究を深めることも大事でしょうし、それ以外のメディアを使った教育について研究していくことは、非常に大事なことでと思います。

### ○司会

ありがとうございました。

### ○北条（信州大学）

特別な例だと思うんですけれども、信州大学は来年から、各学部を結ぶということで文部省は非常に協力してくださいまして、予算は大蔵省に出していただいているんです。ところが、それを郵政省で電波の枠を取ることになりますと、なかなか大変でございます。聞いてみますと、教育というのは公共性に乏しいらしいですね。それで国際教育云々なんていうのは私はおかしいと思うんで、やっぱり電波の枠も結局は認めてくれたんですが。これは日本の独特のやり方でございますから、最後は強引に言えば認めてくれる。ただ、私どもが要求しております幅の広いのはなかなか取ってくれない。これから特にドクターの研究主体のものでございますので、もっと情報量が必要なわけです。

なぜ残しておかなくちゃいけないかというと、災害があったとき困る、というんです。災害なんかいつくるかわからんのに常にあけておくというのは、もちろんそれは必要でございますけれども、もっと教育に対してそういった関係も理解をしてもらうということで、ランクを上げていただかないとできないと



いうことでございます。

## ○司会

はい、ありがとうございました。

うちに来て、文部省と郵政省をけんかせないでください。（笑声）

日本の放送大学のテレビを見ていて、あれは肖像教育だ、と。肖像教育ってわかりますか。胸から上しか教授の顔が出てなくて、これだけがしゃべっている教育だという酷評をした人がいます。額縁の中に入って人がしゃべっているという感じだ、と。これはなにもディレクターやプロデューサーの責任じゃありません。たまたまその人が頭が少し薄くて、下を向いたり横を向いたりすると頭が光るんで、きっとそういう格好をさせたんでしょう。人によって、撮り方というのは違うんです。

実際にきょうもセイヤーさんは、とにかくちょっとほかのところへ行って授業をやると、普通の大学の2倍半の授業料を取れるんだなんていって、あっちでも2倍半、こっちでも2倍半だなんていう大変うらやましい話をしておりましたが、日本の放送大学は日本の大学の中で一番安い月給で働いております。（笑声）

ただ、これは教育という面でもメディアが入ってきたときに、先生たちがなれていないということは確かです。それまでにNHKとか民間の放送局に、うちの大学の教官は大概出ております。ただ、それはNHKとか民放局の人たちがうまくコントロールして、演出をしているんです。ところが、ここの大学の中の教材を作成する場合には、先生たちが主体になります。ディレクター、プロデューサーが主体になるんじゃなくて、先生たちの、教育ということが主体になっていきます。そうすると、ディレクターやプロデューサーも遠慮をいたします。大学の先生はとにかく唯我独尊であるなんておっしゃいましたが。（笑声）先生によって、言うことをきかないディレクターに灰皿を投げる人もいます。

（笑声）ディレクターは命がけでもって、（笑声）いろいろとにかくコントロールしなきゃいけないということがあるんです。

ただ、これは一時的なものでもって、必ずなれてまいります。だから、この人はテレビの講義は不適當だ、ラジオの講義の方がよろしいとかいうのは、講義する教育の内容によっては変えていく必要があると思いますが、人によって変えるものではないと思います。

そういう点については大変問題があります。私なんかしょっちゅう言うのですが、どんなに話の下手な人でも、この人の講義をぜひテレビに入れてくれ、この方はとにかく話がうまいからどうだとかいうようなことじゃなくて、その人の持っている持ち味で大学の講義の内容というのは八割方決まってくるだろう、と。

大変大ざっぱなことを申し上げましたけど、きょう最後に木田さんが大変難しい問題を出されました。これは来年の宿題に残しておきます。

大変長い時間ご協力をいただきましておもしろい話をしていただきまして、本当に先生たちありがとうございました。これをもってこのシンポジウムを終わらせていただきます。（拍手）